



これからの学術研究都市は地域の視点で

知的装備率を高めるための地域戦略

糸乗 貞喜

(よかネットNO.9 1994.5)

- 4 学術研究都市

先頃、アジア九州交流会（九州における学術交流を進めるための交流会）で「九州北部学研都市はなぜ分散させるのか」とか、「筑波のように集中しないと効率が悪くて何もできないのではないか」などといった意見が出た。これは、せっかく学術施設に投資するのなら集中しないと効果が少なく、九州の学術基盤強化にならないのではないかという意見である。

学研都市ということになると、必ず筑波研究学園都市が引き合いに出されるので、関西文化・学術研究都市（以下京阪奈という）とともに整理をしてみたい。

学研都市のねらい

筑波は東京にある国立研究機関が狭隘となり、拡充ができなくなっていたので、首都圏の中で集約移転地を探していて、3箇所の候補地の中から筑波に決まったものである。決して茨城県や筑波周辺の地域づくりや、知的インフラの充実などということは考えられて始まったものではない。したがって、研究用地開発についても、国立研究機関のための計画であった。現在筑波周辺に極めて多くの民間の研究機関が立地しているが、当初はこれらのことは全く予測されていなかった。

京阪奈の場合は筑波とかなり違って、地域戦略的色合いが強くなっている。つまり目的として「関西の地盤沈下を防ぐ。文化・学術研究機関などを中心とした都市建設を進めて、民間企業を誘致し将来に向けて浮揚をはかろう」というコンセプトであった。また、研究内容についても、東京と同じものでなく、関西の特色ある研究を進めて特色を出そうという方向づけがなされた。これらの方向づけがなされたのも、筑波が予想外に「地域づくり効果」を発揮していたことから学んだという面もある。

国策の受け皿か、地域づくり戦略か

筑波は国策の受け皿となったが、当初全く予想

もしなかったほど大きい波及効果を地元にもたらした。また、この頃から文化や科学技術が、地域活性化に大きなインパクトをもたらすことがわかってきた。今では、昔あれほど言われた「工場誘致」というかけ声より「研究機関誘致」の方が評価が高いくらいである。

これらの動きを踏まえて、京阪奈の方は地域づくり戦略として発想されており、ねらいとしても民間の研究機関立地を主目標にかかげることとなった。もちろん国策的な研究機関誘致は熱心に進められたが、それは国策の受け皿としてではなく、地域の研究機関機能向上による活性化をねらったものである。

この京阪奈の考え方も、筑波が地域に対して大きい波及効果を持ったことから学んだものである（もちろん諸外国のサイエンスシティからも学んでいる）。もし仮に地域づくりに対する効果が全く期待されないならば、迷惑施設的な性格（バイオテクノロジーや放射線をとまなう研究機関では、常に住民とのコンセンサスが必要になっている）を持つのみとなりやすい。そうでなかったため、関西では各府県間でプロジェクトの取り合いになっていった。その結果、「近畿リサーチコンプレックス」として全体が位置づけられ、京阪奈（京都府・大阪府・奈良県の接点）以外でも兵庫県・滋賀県・和歌山県などが類似のプロジェクトを推進することになった。

つまり、関西での学研都市プロジェクトは決して集中しているわけでないのである。

筑波は集中、九州北部は分散といえるか

九州北部はなぜ分散配置の計画にしたのかといわれるが、果たしてどうであろうか。

筑波は、1か所に研究機関が集約されており、京阪奈はクラスター型（ぶどうの房状）に離れているように見られているが、そのように単純かということも必ずしも正確ではない。筑波は東京の山

手線の範囲ほどの拡がりがあり、少し離れた研究機関を移動すると、1時間ぐらいかかる。京阪奈の場合は拡がり、筑波とそれほど変わらないが、交通インフラが未整備であるのでさらに不便でもある。

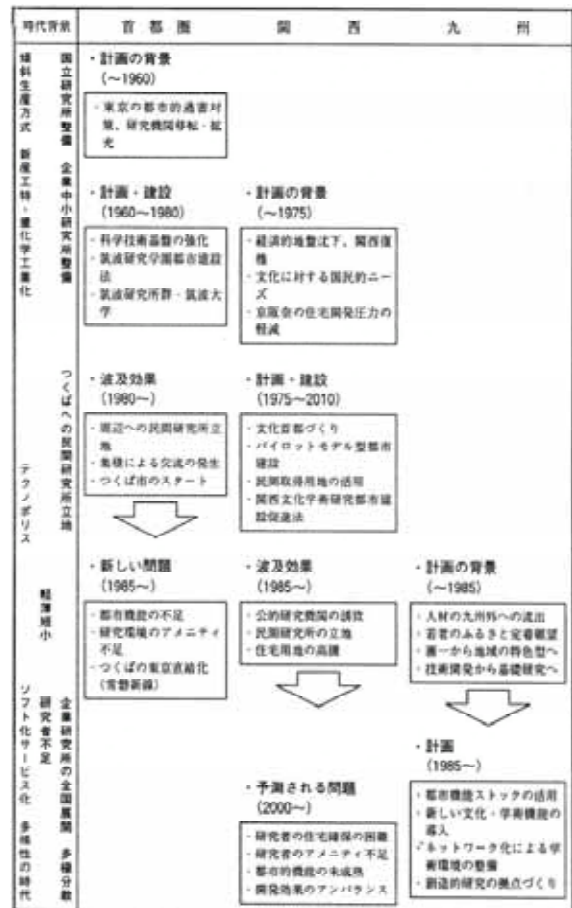
九州北部学研都市ゾーン（7拠点）の場合は、距離は4倍くらいとなっているが、時間距離は2倍ぐらいにしかならない。福岡（博多駅）から佐賀まで約40分で移動できるし、小倉～博多はさらに近い。7拠点間が相互に1～1.5時間で交流できるので、“1日仕事圏”という言葉で表現している。

学研都市推進の主役は

筑波はすでに述べた経緯からみても、国主導であることが明白である。もともと3か所あった候補地の中から決まったものであり、この都市建設について茨城県や地元市町村がイニシアチブを發揮したりすることはありえなかった。

京阪奈の場合は、主役は府県と財界である。民間の宅地開発をリードして学研機能導入を図ったり、国家的研究機関の誘致などについては寄附（出資金）を集めたり用地を提供したりということが行われた。これは学研都市の目的が、地域の文化・学術面での浮揚ということにおかれていることを財界・府県が一致して認めていたからである。しかし、それは京阪奈の3府県について言うだけで、兵庫県は西播磨で放射光施設を誘致することとなり、あるいは大阪府の場合でも千里地域での文化・学術推進ということと並行的に進められることとなった。

これらのことから言えることは、国のプロジェクトとして進められる場合でも、それが地域づくりにとってプラスになるという認識がもたれていない間は、1か所に集中立地させて進めることができるが、ひとたび地域活性化への効果が認識されてしまうと分散配置になりやすいことを示して



図表1 学研都市づくりと地域特色・時代背景

いる。極端な言い方をすると、迷惑施設的にとられると、弱いところに集約して押しつけられるが、地域にメリットがあるとなると、取り合いになり、分散立地になりやすいということである。

卑近な言い方をすると、筑波は国の産業政策、教育政策、科学技術政策を受けたもので、通産省・文部省・科技厅などのタテワリ的な意味合いを持っていたが、京阪奈の場合は、それと府県の関与が大きくなることによって、地域的・自治省的な色合いが加わったとみられる。

九州北部の場合はどうであろうか。この場合はさらに自治省的な傾向が強まり、一層地域づくりのプロジェクトとなるのではなかろうか。現実に九州北部では、県だけでなく拠点市が動き出している。

都市建設という立場から

もうひとつ、都市づくりという視点で比較をしてみたい。都市づくりをはじめするには、筑波はもともとのストックがほとんどなく、極めて不利であった。京阪奈丘陵もあまりなかった。それにひきかえ九州北部はすでに大都市が拠点となってい

るので、都市機能が満たされた状態にあるということである。

まず、比較するには少し無理な面もあるが、一応対象市町村の人口の比較を試みる。

・筑波（つくば市）（H2年）	143,000人
土浦市を加えると	270,000人
旧5市町村のS55年は	81,200人
当時一番人口が多い町（谷田部）	22,200人
・京阪奈	
京都府3町（H2年）	89,700人
大阪府3市	506,100人
奈良県2市	449,000人
合計	1,044,800人
人口が多い都市は枚方市	391,000人
奈良市	349,400人
・九州北部（H2年）	
福岡県内	4,817,000人
佐賀県内	467,500人
合計	5,284,500人

もちろん、筑波のように人口の少ないところをねらって建設されたプロジェクトと、九州北部のように既存大都市を内包しているものとを同列に比較することはおかしいかもしれない。しかし、ここでいいたいことは、既存の都市機能の果たす役割の大きさと、そのような高次な機能をもつ都市建設こそが、“学研”という意味を持つのではないかということである。

人口比較は少し無理があるので、近くに形態できる大都市があるかどうかという点について検討してみたい。

・筑波	
土浦市（12km）	127,500人
牛久市（10km）	60,700人
水戸市（50km）	235,000人
東京都（50km）	11,609,700人
・京阪奈	

奈良市（8km）	352,900人
生駒市（9km）	102,500人
京都市（25km）	1,395,000人
枚方市（13km）	392,700人
大阪市（25km）	2,495,300人

・九州北部

北九州市（福岡と50km）	1,015,400人
宗像市（北九州、福岡と25km）	71,300人
飯塚市（北九州と30km、福岡と25）	83,400人
福岡市（久留米市と30km）	1,214,100人
鳥栖市（福岡市と25km）	56,000人
久留米市（佐賀市と20km）	229,000人
佐賀市（福岡市と40km）	166,900人

筑波は25年たっても、中心部に少し都市機能ができただけである。結局、東京に依存さざるを得ないし、筑波新線が建設されれば東京都の時間距離が短くなり条件が良くなるだろう。

京阪奈は京都・大阪・奈良という都市を連携さざるを得ない。京阪奈学研都市の中で都市機能を整備することは長期的未来の話にならざるを得ない。

九州の未来をつくるための地域戦略

いろいろ述べたように、九州北部が目指しているものは“研究団地”づくりではない。“研究都市”づくりでなければ本来の機能を果たしてないであろう。念のために述べると、今後の国づくり、地域づくりにとって、筑波のように数十年もかけて都市建設をするようなプロジェクトは、不可能ではないかと思う。すでにある都市機能を活用し、レクリエーションや地域文化（九州には祭が多いし、祭の楽しみ方のうまい人間が多い）を享受しながら、住宅・研究・工業の用地を開発し、ハードインフラを整備すれば、楽しい研究都市ができて上がる。

ひとつだけ気になっていることは、九州の人々は“もてなし”はうまいが、研究にコーディネー

トには慣れていないかもしれない。まず、研究コーディネーター・支援などの働き手を育成して、各拠点に住宅・研究・工業用地開発をして、研究しやすく、働きやすく、住みよい九州北部学研ゾーンをつくりたいものである。

追記：10年前の計画づくりであったが、今では全く静かになってしまっている。本来、文化や科学技術はハードのハコモノではないので、既存の都市を活用・活性化した「ネットワーク型」の学研都市建設を目指した。このネットワーク型というポイントは評判が悪かった。とにかく「用地造成をしてハコモノを、国の補助金で建てる」という開発風土から見ると、わかりにくかったようだ。既存都市活用、その飲み屋までが文化・科学技術のインフラだといっても、受け付けてもらえなかった。

ところが10年経って、口を開くと「ネットワーク型」と言われるので、少々とまどっている。

(2004.5 いと)